



写真-1 谷山川に吊るされた風鈴が涼やかな音色を響かせる（平成27年8月撮影）

■ 谷山川に架けられた風鈴の音が涼を呼ぶ

上の写真-1は、出石城跡の北を東から西へ流れる谷山川を登城橋から撮ったものです。登城橋と有子橋の間には、兩岸に渡した11本のひもに、トンボやメダカなどが描かれた出石焼※1の風鈴約400個が吊るされ、「出石藩夏まつり」と書かれた短冊が川面を吹き抜ける風に揺れて涼やかな音色を響かせています。

この演出は、平成20（2008）年に始められ、出石藩きもの祭り実行委員会・但馬國出石観光協会・まちづくり公社・商工会が主体となって毎年7月、8月に行われています（最近8月のみ）。



写真-2 谷山川に吊るされた出石焼の風鈴

※1 出石焼：出石焼は、垂仁天皇時代（紀元前29年～西暦70年）に天日槍命（あめのひこのみこと）が陶土を従えて但馬出石に到来し、永住の地と定めて衣食住に必要な食器類を焼いたことに始まると伝えられている。出石焼の形成は、天明4（1784）年に伊豆屋弥左衛門が出石郡細見村に土焼窯を開設したことがきっかけとなり、寛政元（1789）年に二八屋珍左衛門が出石町谷山の柿谷において白色原石を発見したことが現在の出石焼の基礎となった。安政期（1854～59）には、当時の著名な染付師・鹿児島屋肅平が出石町西位花山に窯を築き優れた作品を作出し、その作品は現在でも愛陶家の垂涎の的となっている。明治初年に廃藩置県が行われた際には、土族に職業訓練を行うために佐賀県から陶工・柴田善平を招聘し、土族の子弟数十名を集めて伝習させた。次いで県立陶磁器試験場が設立され、石川県から招聘された画工・友田安清が白磁彫刻等の美術品の製作を行い、白磁出石焼の名声を高めた。また明治35（1902）年米国セントルイスで開催された万国博覧会において出石焼は金賞を受賞し、現在に至るまでこの作品が出石焼の代表作とされている。昭和55（1980）年3月に、通商産業大臣から伝統的工芸品に指定された。

出石の町は、有子山北麓を東から西に流れる谷山川が造った沖積地に造られています。この町は、戦国時代、但馬守護を務めていた山名祐豊（すけとよ）がその基礎を造ったといわれています。

祐豊は出奔して堺の商人・渡辺宗陽を頼ります。その後、信長の御用商人・今井宗久の斡旋で但馬帰国が許されます。



- 2 -

帰国した祐豊は、あっけなく落城した此隅山城を捨て、天正 2 (1574) 年頃に、急峻な有子山(標高 321m) 山頂に有子山城を築きます。有子山は、南麓を東から西に流れる出石川が、90 度北へ流れを変え、南と西の二方向を出石川で守られた形になっています。有子山城下には常に住まいする館と城下町を築き、それが出石の町発展の基礎となっています。

天正 3 (1575) 年、祐豊は尼子氏の圧力に対抗するために毛利氏と和睦します。この頃祐豊は、織田・毛利両氏の間をうまく立ち回っていましたが、天正 4 (1576) 年信長に追われた将軍・足利義昭が毛利氏を頼るようになると、織田・毛利両氏の武装平和はたちまち決裂し、山名氏をはじめとする但馬の諸将はその立場を鮮明にせざるを得なくなります。しかし祐豊は、いずれにも与(くみ)せず日和見の立場をとり、織田方の誘いに応じませんでした。



写真-3 長砂橋から出石川および有子山を望む

■ 羽柴秀長、有子山城を但馬支配の拠点とする

天正 8 (1580) 年別所長治が自刃して三木城が落城すると、秀吉は播磨の再制圧に着手するとともに、異父弟の秀長を但馬に進攻させます。5 月 16 日、有子山城はあっけなく落城し、祐豊の息子・氏政は因幡へ出奔、息子に見捨てられた病床の祐豊はその 5 日後に死去。(享年 70)

秀長は、但馬七郡^{※1}を治めるとともに対毛利戦争の拠点の城郭として、築城の名手・藤堂高虎に命じて有子山城を整備、山頂部を野面石の高石垣を持つ城郭に改修し、大堀切や広い千畳敷を設けました。

※1 但馬七郡：朝来(あさこ)、養父(やぶ)、出石、気多(けた)、美含(みくみ)、城崎、七美(しつみ)の七郡。



写真-4 有子山城本丸の石垣と虎口
(『有子山城跡』パンフから引用)

■ 小出吉英、出石城を築城

天正 10 (1582) 年 6 月本能寺の変により信長は明智光秀に討たれ、天下統一は光秀を討った秀吉の手に。1 年後の 6 月、秀吉は大坂城に入り、そこを本拠と定め、姫路城には秀長を置いて但馬・播磨を支配させることにします。有子山城主は、その後、秀吉に長年忠誠を尽くした前野長康(1585~1595)・秀吉の馬廻として仕えた小出吉政(1595~1604)・吉政の嫡男の小出吉英(こいでよしひさ)(1604~)と続きます。

慶長 9 (1604) 年に小出吉政の跡を継いだ小出吉英は、有子山城の居館部を改修して出石城を築城します。その後、慶長 20 (1615) 年の「一国一城令」により有子山城を廃城とし、出石城の前面に「三の丸」を設けました。吉英は、80 歳で没する直前まで藩主の座にあって、城下町の経営に尽力したそうです。



写真-5 出石城

■ 谷山川を付け替えて七曲りの外堀に

前述のとおり、山名祐豊、羽柴秀長、小出吉英の 3 名が、出石の城下町形成に大きく関わっていて、この時代のどこかで、戦略上の理由から谷山川が町を囲い込むように屈曲した七曲りの流路に付け替えられました。

現存する最古の出石城下絵図が万治 3 (1660) 年に作成されていますが、そこには不自然に屈曲した谷山川と、町の西側を北流する出石川とで構成された外堀、谷山川の水を引き入れた内堀が描かれています。屈曲した谷山川は間違いなく人工的に付け替えられたものですが、ではなぜ、そしていつ(万治 3 年以前)付け替えられたのでしょうか。

出石の町に今も残る「八木町」、「宵田町」、「田結庄町」といった町名は、山名氏の重臣であった八木氏、垣屋氏(日高宵田城)、田結庄氏の屋敷があったことに因んでいることから、祐豊やその重臣たちが此隅山城下から移ってきた頃の

出石はまだ町づくりが始まったばかりで、施設を配置する上でかなり自由度があったと考えられます。

従って、谷山川を外堀として付け替えるならば、もう少し滑らかな法線にできたはずで、屈曲した法線にせざるを得なかったのは、もう少し時が流れてある程度町づくりが進んでいたからと考えられます。恐らく、秀長あるいは小出吉英の時代に、侵入してきた敵に対し町全体で守る「惣構え（そうがまえ）」の町を造るために、谷山川を無理やり付け替えて、その内側に武士や町人を住ませたのではないのでしょうか。

いずれにしても、織豊末期、あるいは江戸時代初期に道筋に合わせて外堀や内堀が整備され、水がぶち当たる屈曲部については石垣を設けて補強されたものと思われます。

『仙石家譜』に記されている災害記録の中で、具体的地名をあげて洪水氾濫の状況が記されているのが、嘉永 3 (1850) 年の洪水で、概ね下記のとおりです。

3月3日午前4時頃より風雨激しくなり、谷山川筋の出水、殊の外烈しく、川も道路も一面の奔流となる(3日夜、大橋の下で2.8mに増水)。欄干橋(図-2参照)の上から岩鼻への道路、宗鏡寺(すきょうじ)町丁子屋辺まで一面の河原となり、元の川筋は土砂で埋まってしまう。欄干橋から材木町へ溢れだして、東御門に突き当たる。城山(有子山)からの水も烈しく落下して、内堀の水が溢れて奔流となり、東門前の土手が切れ、溢れ出た水が内町に流れ込む。大手でも堀の水が溢水して、八木町、田結庄町の町屋が床上浸水、さらに鉄砲町辺も床上浸水する。昌念寺御廟辺で土砂崩れ、松畷(なつて)の松並木も数十本倒れる。馬場町も床上浸水し、同地区の道路では深いところで約2.1mの浸水深であった。



写真-6 欄干橋の親柱

「3月出水」は、融雪によるものなのでしょうか。但馬勤務の経験がない筆者には想像が付きません。

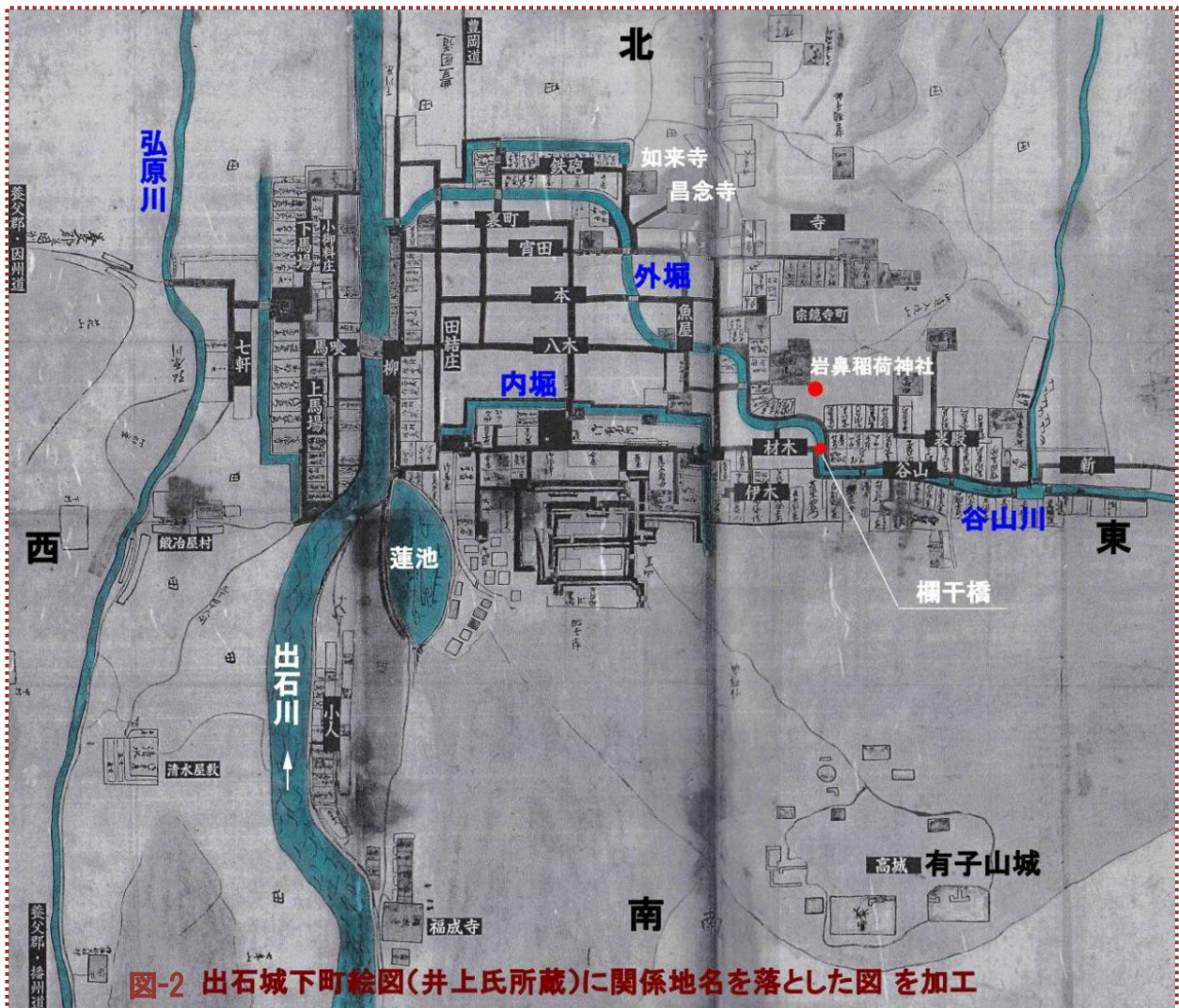


図-2 出石城下町絵図(井上氏所蔵)に關係地名を落とした図を加工

■ 旧出石川の背水による浸水被害も

出石川は当時、図-2 のように小人町・柳町・川原町に沿って流れていました。現在「おりゅう灯籠」のすぐ西を北向きに流れている谷山川が、旧出石川の流路です。そして、屈曲した谷山川と旧出石川の合流点が、右の写真-7 の場所です。

江戸時代の出石川は、水量も多く、川幅は現在のおよそ3倍もあったそうですが、増水時、旧出石川の水位が上がると、その背水の影響で大手前通り（辰鼓櫓のすぐ横を南北に通る道）より西はしばしば浸水していたそうです。そのため、金持ちの屋敷は石を二段・三段と積んで、1m 以上嵩上げた敷地の上に建てられていましたが、金のない家は、年に何度か浸水の憂き目をみなければならなかったとか。



写真-7 旧谷山川合流部

■ モノローグ

出石の町は、屈曲した谷山川からの溢水や、出石川の背水による浸水被害に長い間苦しめられてきましたが、抜本的な治水対策を講じるまでには至りませんでした。明治中期から国に要望していた円山川大改修が大正 9（1920）年になってようやく工事着手の運びとなり、円山川の支川である出石川に工事着手したのは昭和初期になってからです。

この時に、出石川の背水の影響を避けるため出石川を付け替えて、谷山川の出石川への合流点を約 700m 下流に移しています。また、屈曲した谷山川は、内町通りに沿ってまっすぐになり、内堀も西半分が埋め立てられて、今は写真-8・9 のように東半分が残るのみ。旧谷山川は埋め立てられて、今はその一部が排水路となっています。

なお、旧谷山川の最初の屈曲部付近に架かっていた「欄干橋」の親柱が、出石高校グラウンドの西端にひっそりと保存されています（写真-6 参照）。

次回は、昭和初期の出石川および谷山川の改修について書こうと思います。



写真-8 今も残る内堀（前方は辰鼓櫓）



写真-9 今も残る内堀

ハグロトンボ（羽黒蜻蛉）

カワトンボ科で別名ホソホソトンボ。翅が黒いのが特徴で、斑紋はなく、雄は体色が全体的に黒く緑色の金属光沢があるのに対し、雌は黒褐色である。他のトンボのように素早く飛翔したりホバリングしたりせず、チョウのようにひらひらと舞うように羽ばたく。平地や丘陵地の、水生植物のはえた緩い流れを好む。平成 24 年 9 月、大橋上流の谷山川で撮影。



写真-10 ハグロトンボ 胴体が黒いのがメス
（平成 24 年 9 月 谷山川にて撮影）

【参考資料】

- 1 『出石町史・第一巻』 出石町史編集委員会 編 昭和 59 年 3 月
- 2 『出石町史・第二巻』 出石町史編集委員会 編 平成 3 年 3 月
- 3 『出石焼～起源・沿革』 兵庫県 HP <https://web.pref.hyogo.lg.jp/sr09/jibasan/28.html>
- 4 『柳町今昔物語』 柳町今昔物語編集委員会 平成 26 年 3 月
- 5 『ぶらり出石の城下町』 但馬歴史研究所編 平成 25 年 3 月
- 6 『但馬の城下町 出石を歩く』 赤在義信著 平成 23 年 1 月
- 7 『出石考』 常盤昭三 平成元年 3 月
- 8 『GIS による出石周辺の洪水記録の作成』 神戸高専研究紀要第 48 号 中尾幸一 平成 22 年
- 9 『但馬の百科事典』 HP
- 10 『山名祐豊、出石城、ハグロトンボ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 28 (2016) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.63

改訂：令和 8 (2026) 年 5 月 『ひょうご水百景』 No.63